対面形式／ Web 形式のハイブリッド授業の実践報告

はじめに

教育開発推進機構 教育・学修支援センター　山岡憲史

コロナ禍により全面 Web 授業になった春学期の成果と課題とともに、感染防止対策で得られた知見を踏まえ、秋学期は一部対面授業が再開されました。また Web 授業においても、先生方の創意工夫と各学部等の職員のみなさんのサポートのもと、多くの改善がなされたことと思います。その中でも、対面授業と Web 授業を組み合わせた「ハイブリッド型授業」は新しい授業形態として注目され、全体の 27％で実施されました。（シラバスによる統計。2020 年 10 月 19 日　臨時教学委員会資料による）。

「ハイブリッド型」授業は、おおよそ次の 3 つのタイプに分かれます。

① 全授業回を対面授業と Web 授業に分けて実施する。

② 出席者をグループ分けし、実施回によって対面と Web 参加を入れ替える。

③ 対面授業を実施し、同時にライブで Web 授業を配信する。

2020 年度第 3 回の教学実践フォーラムは、言語教育センターと教育・学修支援センターとの共同共催で開催し、ハイブリッド型授業の優れた実践をしておられる 3 人の先生方にご登壇いただきました。

国際関係学部の越智萌先生は、ゼミ形式の小集団授業で、学生の状況や都合により対面、Web でのライブ配信、VOD のいずれを受講するかを選択できる形態の授業を実践され、どの参加形態でも学びの質を担保する緻密な方針やルールに基づいたハイブリッド型授業のメリットを強調されました。

言語教育センターの田村彩子先生は、学生の希望に配慮しながら、受講者の半分を対面、残る半分を Web でのライブ配信で毎週交互に受講させる方法を実施されました。解説や小テストなどでの工夫をされて、全面対面授業の場合と同じ内容と質の授業を提供しようとされた成果をお話しいただきました。

同じく言語教育センターの肖海娜先生は、対面授業の実績と春学期の Web 授業の体験を生かして、どちらの良さも生かす実践を試みられました。教員と学生、学生同士のインタラクションや交流を大切にし、パワーポイントコンテンツの充実にも多大な努力を傾けられ、授業の質向上を目指されました。

ハイブリッド型授業やハイフレックス型授業（ハイブリッド型授業に加え、その模様を録画して後に VOD として配信する授業）は、来年度以降コロナ禍が収束した後にも、新たな授業形態としてさまざまな可能性を高めていくことでしょう。その意味で、3 人の先生方の実践から得られる示唆には極めて貴重なものがあると思われます。

対面／Webのハイブリッド式ゼミ授業～3タイプの参加形態確保の試み～

国際関係学部・国際関係研究科准教授　越智　萌

ハイブリッド型で行うことが求められたのは、報告とレポート作成がメインとなる1回生向けの小集団科目「基礎演習」（受講生24名）と、報告と議論で構成される2回生向けの小集団科目「国際関係学セミナー」（受講生16名）である。対面授業に加え、ライブ型とVOD型でのオンライン参加に対応するいわゆる「全部盛り」のハイフレックス型授業が必要となった。授業設計にあたって、「ハイブリッド授業における自分の指針」を決めた。これは、進むべきと考える基本的な方向性であり、判断に迷ったときに立ち戻れる指針で、この指針に沿って、必要な機材、機能、スキルを獲得していった。その理由は、迷っている時間がないことと、学生に対する説明責任を果たす必要性である。この指針はハイブリッド授業をすることになって早い段階で考案し、実践を通じて修正していった。この指針をどのように設定するかによって、ハイブリッド授業を「どうやるか」が決まった。以下、3つの指針に沿って、「どうやったか」について報告する。

図1　オンライン参加学生によるプレゼンテーション。対面参加の学生がサポートしている。

指針1は、公平であることである。まず、異なる参加形態ごとに学びに差をつけない工夫を行った。例えば、グループワークでは、Zoom参加者を班ごとにブレークアウトルームに分け、異なるデバイス（学生のものも含む）を割り当てた。また、学生の提案でヘッドフォンオーディオスプリッターを使用して音声を聞き取りやすいようにした。板書をする時は、画面共有をオフにするといった細かな気配りが必要になった。また、すべての参加形態において学生からのインプットを要求した。毎回学生からのフィードバックはmanaba+Rの「プロジェクト」に提出することで統一し、VODで報告した学生についても同じページでフィードバックを行った。

図2　Zoomで配信された授業風景。約半数の学生がオンライン参加している。

指針2は、受講生に無理をさせない・不安がらせないことである。特に、学生がすぐに選択・変更できることを優先した。そのため、代替手段は必要な時だけでなく常に用意してある状態を作った。例えば、前後の授業がライブ型授業で対面授業に来るのが負担な場合はオンライン型で参加でき、ライブ型授業中に回線が落ちたといった緊急時も、あとでVOD視聴可能である。Zoomの待合室機能は無効化、授業開始時間までには自分も入室することを優先した。また、Zoomがダウンした時のために複数デバイスを用意した（ノートPC、iPad、iPadスタンドに加え、緊急時は個人スマホの4Gで対応した）。

指針3は、受講生の都合に関する真実を追求しないことである。これを教員の問題ではなく学生の問題と理解することで対応した。真実の追求は不可能であり、この点に時間を割くことを徹底的にやめて、時間と労力を節約した。

最後に、教員負担減のための工夫について述べる。なによりも効率化が必要である。毎回のセッティングは、必要機材を一つの袋に入れ、セッティングの優先順位を決めておくことで準備時間を大幅に短縮できた。また、Zoomの設定を完璧にしておくこと（入室時にチャイムが鳴るように設定、1授業につき同じルームを1セメスター使い続ける等）が役立った。ハイブリッド授業のメリットを確認しておくことで、モチベーション維持を図ることも重要である。学生にとっては、遠隔からでも知的交流を経験できるという最大の利点がある。対面参加の学生とライブ参加の学生が交流（iPadごしに集合写真等）し、またmanaba+R上で対面授業に参加している学生とVOD参加の学生が意見を交換できたことは大きな成果といえる。教員からしても、コロナ禍においても、感染症対策しつつ、従来のように対面で学生の反応を見ながら授業することができる。そのため、負担を超える充実感があったことを、最後に強調しておきたい。

対面形式とオンライン形式の併用による中国語のハイブリッド授業実践報告①
～一回生配当中国語「文法」の実践例～

言語教育センター外国語嘱託講師　田村彩子

はじめに

2020 年度秋学期に実施した、対面形式とオンライン形式の併用によるハイブリッド授業についてご報告します。ここでは、日本人教員担当の一回生配当中国語「文法」の授業についての概要を取り上げます。

1，ハイブリッド授業概要

実施期間は 10 月 2 週目～大阪府に外出自粛要請の出た 12 月 1 週目まで（12 月 2 週目からは全面 Zoom 授業に切り替え）。1 クラス 30 人程度の受講者を半分に分け、半分は教室での対面授業、半分は Zoom 同時配信授業。教室はカメラ（MeetUp）と PC、スクリーンのある一般教室を使用。

2，事前準備

①授業方法を manaba+R に提示　→②授業スケジュールと、対面 /Zoom 組分け名簿の作成・manaba+R に提示　→③対面を希望しない学生の把握　→④授業用のスライド作成　→⑤ manaba+R 小テスト作成

A班	B班
氏名	氏名
・・・	・・・

展開	水（文法）	金（コミュニケーション）
1	9・30 Zoom	10・02 Zoom
2	10・07 Zoom	10・09 Zoom
3	10・14 A対面	10・16 B対面
4	10・21 B対面	10・23 A対面
5	10・28 A対面	10・30 B対面
6	11・04 B対面	11・06 A対面
7	11・11 A対面	11・13 B対面
8	11・18 B対面	11・20 A対面
9	11・25 A対面	11・27 B対面
10	12・02 B対面	12・04 A対面
11	12・09 A対面	12・11 B対面
12	12・16 B対面	12・18 A対面
13	12・23 A対面	12・25 B対面
14	01・06 B対面	01・08 A対面
15	01・13 A対面	01・15 B対面

3，授業の流れ

授業前：①教卓の PC、スクリーンなどの電源を入れる　→② MeetUp の USB ケーブルを PC に接続 →③ Zoom を起動（マイクとオーディオを MeetUp に）　→④授業準備（ここまでに 10 分程度かかる）

授　業：①音読　　対面組のスピード、習熟度に合わせて Zoom 組と一緒に練習。
　　②解説　　事前に用意したスライドや、使用許可を得たテキストの PDF を使い、スクリーンで解説。
　　③発表　　対面、Zoom どちらも発言してもらう。
　　④小テスト　単語を教員が読み上げて記入するディクテーションテスト。音声が聞き取りづらいときはリクエストで再度読み上げ。

授業後：①小テストの結果を manaba+R に反映　→②授業内容とその日の課題を manaba+R にアップ

5，ハイブリッド授業の良い点 / 悪い点

良い点：友達に会えて喜んでいる学生がいる。対面組の反応や習熟度が見えやすい。対面 / オンラインが選べる。

悪い点：強制できないことが多く、対面のメリットが生かしにくい（例：マスクを外しての発音練習ができない、全員対面での試験が行えず評価が難しい）。教員 1 人で 2 つの授業をやっている状態でタスクが多い。マスクでの発話がつらい。換気のため教室が寒い。

6，工夫した点

教員のタスクの多さを軽減するため、教室で Zoom 授業を行っている形にしてタスクを減らした。解説や問題はスクリーンに映し、黒板は使用しなかった。

結果：授業が破綻することはなかったが、対面授業のメリットを生かせなかった。

7，成果

おおむね例年と同内容の授業を行えた。習熟度は、例年に比べて単語や発音の定着に不安あり。文法の理解は例年とあまり変わらないか。

対面形式とオンライン形式の併用による中国語のハイブリッド授業実践報告②
～一回生配当中国語「コミュニケーション」の実践例～

立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師　肖　海娜

本報告では、2020年度秋学期にOICキャンパスにてハイブリッド授業形式（対面授業とZOOMライブ授業配信を同時実施）で開講された中国語コミュニケーションの実践を紹介しました。主にハイブリッド授業の質を高めるために、授業内容の可視化を重視し、対面受講生やZOOM受講生のインタラクションを活発化させ、主体的に学習することを授業の運営方針とし、全講義PPTコンテンツを作成、グループワークを積極的に取り入れ、受講生の発話機会を増やす工夫などを行いました。また、当該科目の到達目標に沿って、組み立てた学習到達度評価の実施状況を報告しました。

【ハイブリッド授業の工夫点】

ハイブリッド授業では、教室の黒板を用いるのが難しいため、異なる場所にいる受講生に授業内容をどのように可視化し、効果的に伝えれば良いかが問われます。本科目では、パワーポイントを用い、コース共通PPTコンテンツを運用しました（同コースの先生からのご提案）。講義時、授業のニーズに合わせPPTコンテンツをベースに、更にスケジュール、課題のフィードバック、文法授業で実施済の文法項目、本文内容の復習などを盛り込みました。また、ハイブリッド授業形式におけるグループワークでは、教員が対面受講生とZOOM受講生を念頭に置きつつ、より効率的に活動を進行させるために、①グループ分け、②時間設定、③資料の配布方法、④成果の提出方法、⑤成果のフィードバックの工夫点を紹介しました。更に、毎回中国語で出席を取り、受講生の出席状況、通信環境を把握した上で、講義内容に関する質問、発音や会話の意味理解の確認を行い、受講生の自主的な学習姿勢を促す取り組みを行いました。

【ハイブリッド授業の課題】

ハイブリッド授業の課題に関して、「対面授業における、感染防止のためのソーシャルディスタンス、マスク着用のチェック、教室の換気など事前準備が増える点」、「対面受講生がマスクをしているので、口の形や誰が発話しているのかが分かりにくい点」、「授業中、対面受講生に意識が偏りがちになる傾向がある点」、「ZOOMチャット機能がオンライン授業より使いにくくなる点」を報告しました。

【ハイブリッド授業における学習到達度評価】

受講生全員を同じ場所に集め、一定の時間で解答させるテストを実施することができない状況の中、学習到達度をより的確に評価する仕組み作りが如何に重要且つ困難であるかを実感しました。当該科目では言語構造的能力を測るために、Manaba+R「自動採点小テスト」機能を用い、小課題（1回／1課）、中間、期末復習課題を実施しました。課題の公開日及び締切日をコースニュースに掲載し、毎回の課題公開日を揃え、締切日を1週間間隔で設定しました。

一方で、中国語による自己表現・発話する能力を測るために、リアルタイムで中間、期末会話テストを行いました。ここでは、会話テストの実施経験をまとめ、ハイブリッド授業における会話テストの設計ヒントを提示します。①テスト用紙を2種類用意し、対面受講生にプリントレジュメ、ZOOM受講生に電子版レジュメ（Manaba+R）を配布する。②待っている受講生のために課題を用意する。③テストを実施する順番は、対面受講生→ZOOM受講生の順に実施する。これにより先にテストを受けた対面受講生は落ち着いて課題に集中しやすい傾向が見られました。④事前準備として、会話テストの詳細をコースニュースへ掲載、通信環境の不具合などでリアルタイム参加できない受講生への課題作成、ルーブリックシートを事前に配布・評価基準の共有を行いました。報告では、テストの問題（会話・音読）、ルーブリックシートの作成方法を紹介しましたが、ここでは詳細については割愛します（図1）。

今回のハイブリッド授業の取り組みで得られた経験を活かし、語学教育の可能性を広げ、受講生の多様なニーズに応える講義を構築していきます。

会話テスト

期末会話復習課題

範囲：Level２第５~１０課

1. 请问，去立命馆大学坐什么车?

2. 星期天你一般做什么?

3. 星期二上午你几点下课?

1/1

中国語・会話復習課題用ルーブリックシート

満点：6点　（当てはまる箇所に「✓」を付ける）

担当者：肖海娜

名前	問題番号	①回答の流暢さ			②回答の発音			③回答の文法		
		流暢	流暢でない	無回答誤回答	ほぼネイティブ	聞き取れる	聞き取れない	ミス無し	一部ミスあり	完全間違い
		2点	1点	0点	2点	1点	0点	2点	1点	0点

重要項目を質問文の形で全12問の問題レジュメと、回答の「流暢さ・発音・文法」を評価項目に会話テスト用のルーブリックシートを作成した。

考察範囲の授業用ＰＰＴコンテンツから会話文を8組取り出し、問題を組み立てた上で、評価するための音読テスト用ルーブリックシートを作成した。

中国語・音読チェック用ルーブリックシート

満点：6点　（当てはまる箇所に「✓」を付ける）

担当者：肖海娜

名前	問題番号	①読めない	②ピンインの発音		③単語の声調					④音読の流暢さ	
			ミス無し	ミス有り	ミス無し	ミス有り				流暢	流暢でない
						1声のミス	2声のミス	3声のミス	4声のミス		
		0点	2点	1点	2点	1点				2点	1点

音読テスト

図１

立命館大学教育開発推進機構　〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL：075-465-8304　FAX：075-465-8318　email：fd71cer@st.ritsumei.ac.jp　http://www.ritsumei.ac.jp/itl/
発行日：2021 年 3 月　　編集・発行：立命館大学　教育開発推進機構